

編集後記

大学院法学研究科論文集第五十八号が刊行された。本年は投稿された論文が三点といささか少なかったものの、その内容はいずれも学問的水準の高い優れた力作である。今回本号に掲載された論考は、法学研究科に在籍する博士課程、修士課程の大学院生の手になる論文である。

こうした日頃の研鑽の成果を世に問う試みは、論文の執筆者の自信につながるだけでなく、他の大学院生にも大きな刺激となる。とりわけ修士課程の学生諸君が自らの論文を投稿、掲載できる機会に限られており、大学院論文集という発表の場は自身の研究を公にすることで広く先輩研究者などから有益なアドバイスを得る僥倖に恵まれることも少なくない。

活字の力はやはり大きい。私事にわたって恐縮ながら、担当編集委員は修士一年と博士一年のとき本論文集に投稿したことがきっかけで、学界で活躍する他大学の先輩研究者から研究会に参加する機会を頂戴した経験がある。研究会でうけた多くの刺激は、その後の研究生活の糧となっている。

本号の編集に際してご尽力いただいた慶應義塾大学出版会の村山夏子、堀井健司の両氏に深甚なる感謝の意を表すしだいである。

平成三十年五月

『大学院法学研究科論文集』担当編集委員 法学部教授 笠原 英彦